

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会会）

教育部会名：医学教育部会

部会長名：三浦 靖史

作成者名：三浦 靖史

概要（2000字）

（1）組織・運営について

・部会構成、実施体制など

医学教育部会は、クォーター制が初めて導入された今年度、基礎教養科目として「医学 A」、「医学 B」、「保健学 A」、「保健学 B」、「健康科学 A」、「健康科学 B」の6つの講義を、第1、第2クォーターにそれぞれ2コマ、第3、第4クォーターにそれぞれ1コマずつ、保健学科と医学科/附属病院に所属している医学部教員が、それぞれオムニバス方式で担当して開講した。各講義の主担当教員計6名が代表となって、各科目を分担して担当する構成教員の講義内容とカリキュラムの調整、シラバスの作成を行うとともに、授業の改善に関する検討は各教員からの意見を集約して、教育部会長ならびに幹事と調整して実施しており、従来通りである。

（2）実施状況について

・開講科目と学習目標

開講科目は前述のとおり、「医学 A」、「医学 B」、「保健学 A」、「保健学 B」、「健康科学 A」、「健康科学 B」の6科目であり、各科目のテーマと学習目標は以下のとおりである。医学 A：現代社会の中で、大学生、社会人として生きていくためには、ストレスの理解、自己健康管理などのノウハウを身につけておくことは必要であり、このような目的に即した基本的知識を修得する。

医学 B：現代社会は環境変化により新しい感染症も未だに出現するため、どのような対応策が未来社会においてあるのか学ぶ必要がある。一方、老化という問題はさけては通れず、老化に伴い動脈硬化が起こり、疾患が増加するため、若いときから、スポーツにより身体の健康を維持するなどの基礎知識を修得する。

保健学 A：日本は世界でもトップレベルの長寿国であるが、今日のような長寿社会がもたらされたのは、病気の予防対策や検診などを初めとする保健学の進歩のおかげである。一方で、新しい感染症の出現や人口構成の変化に伴う病気の変化など、さまざまな新しい課題が次々と生じており、感染症、細胞の機能、アルコールの人体への影響、長寿社会と高齢者の保健、生活リズムと保健およびメンタルヘルスについて知識を修得する。

保健学 B：近年の医療の進歩により、かつて治療が難しく死に至ることが当然であった、がんのような悪性の病気であっても、病状をコントロールして生存できるようになった。しかし、良い治療成績が得られるためには、早期診断と早期治療、そして健康管理が欠かせない。そこで、重要と考えられる生活習慣病、がん、神経機能、女性の健康の基礎知識を習得する。

健康科学 A：我々が毎日、食べたり、運動したり、物を見聞きし考えたり、眠ったりしていることは当たり前のことのようにだが、全ての身体の機能が順調に機能して初めて可能であり、健康に関する基礎知識を習得する。

健康科学 B：病気や怪我になって初めて健康のありがたさが分かるというように、健康であればあるほど健康については関心が薄くなりがちである。そこで、健康管理の対象となる心と身体について、それらの機能とも関連づけながら学ぶことにより、自身の健康への興味を高め、健康管理ができるような知識を習得する。

・ 今年度の工夫・改善点

今年度はクォーター制が新たに導入された初年度であったため、クォーターの期間内にバリエーションに富む講義がまんべんなく行われるように教員の特徴を考えた担当割を実施した。また、講義の実施に当たっては、主担当教員より各分担教員に昨年度の講義アンケートで指摘を受けた要修正な事項、例えば、講義ハンドアウトの配布や、刺激の強い医療系スライドの使用を避けることなどの注意事項の伝達を行った。

・ カリキュラム

各講義のカリキュラムは以下のとおりである。

医学 A:

- 4月12日 岡田太郎先生 不眠症と睡眠薬
- 4月19日 近藤武史先生 病理医と病理診断
- 4月26日 西 慎一先生 体内の水とナトリウム
- 5月10日 蔵満 薫先生 肝臓移植について
- 5月17日 溝渕知司先生 痛み伝達の仕組み
- 5月24日 下野洋平先生 がんの時代を生きる
- 5月31日 角谷賢一朗先生 運動器の働きと疾患

医学 B:

- 6月14日 定岡知彦先生 ウイルス感染症とワクチン
- 6月21日 大竹寛雅先生 動脈硬化と冠動脈疾患
- 6月28日 佐竹渉先生 錐体外路・小脳の働きと疾患
- 7月5日 篠山隆司先生 脳 の働きと脳卒中
- 7月12日 黒田良祐先生 スポーツ医学
- 7月19日 佐々木直人先生 動脈硬化性疾患の発症機序と治療・予防
- 7月26日 井口元三先生 ホルモンと病気 内分泌疾患とは？

保健学 A

1. アルコール関連障害の基礎知識
2. 生活習慣病の予防
3. がんに対する基本知識
4. 神経系の機能とその疾患
5. 女性の健康に関連する基本知識

保健学 B

1. 感染症総論(亀岡正典)
2. 新興・再興ウイルス感染症 (亀岡正典)
3. 細胞の機能(森 正弘)
4. アルコールの人体への影響(安藤啓司)
5. 長寿社会と高齢者の健康(グライナー智恵子)
6. 生活リズムと健康(塩谷英之)
7. 家族のウェルビーイング(本田順子)

健康科学 A

1. 「生活習慣とメタボの話」 安田尚史教授(内科学)
2. 「食物の消化吸収の話」 上杉裕子准教授(看護学)
3. 「健康と体力と運動の話」 小野くみ子助教(理学療法学)
4. 「骨と関節の話」 森山英樹教授(理学療法学)
5. 「性周期の話」 松尾博哉教授(産婦人科学)
6. 「妊娠と出産の話」 清水 彩助教(看護学)
7. 「ホルモンと免疫の話」 安田尚史教授(内科学)

健康科学 B

- 1) 脳と心の話1： 林 敦子(神経心理学)
- 2) 生体の日内リズムの話： 柱本 照(内科学)
- 3) 性感染症の話： 松尾 博哉(産科・婦人科学)
- 4) 感染症と予防の話： 三谷 理恵(看護学)
- 5) 皮膚と健康の話： 前重 伯壮(理学療法学)
- 6) 運動器と外傷の話： 三浦 靖史(リハビリテーション医学)
- 7) 脳と心の話2： 林 敦子(神経心理学)

・現状と評価

1) 「教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。」という面では、6科目共通して、病気に関する正しい知識と自己と他者の健康への配慮の基礎となる知識を得られることを目標にしており、例えば単なる疾病論の講義でなく、学生が健康管理への関心が高められるようにオムニバス形式を用いて工夫した。このように、部会が担当する各科目は、社会的に重要な健康や病気に関する内容を幅広く取り上げており、全体として学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等の趣旨に十分に沿ったものであると考えられる。

2) 「教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。」という面では、基礎教養科目の性質上、授業形態は「講義」に限られており、また、大教室での講義を実施したため、学生個々に対するきめ細かな指導や、少人数・対話討論型授業等の形式による講義を取り入れることは前年度までと同様に困難であった。しかし、教材としてコンピューターによる画像供覧とビデオ映写等の映像機器使用しているほか、講義資料の配布等の学生の要望に添った対応を行い、学生が講義内容を理解しやすいように配慮したことから、多人数の教員によるオムニバス形式にも関わらずほぼ的確な講義が行われたと考える。

3) 「単位の実質化への配慮がなされているか。」に関しては、講義の内容として、社会的に重要な課題となっている疾患や生活習慣、さらには先端的医学研究についてまで幅広く取り上げることで、学生の自主学習意欲を高める一方で、合格点に到達するには、十分な予習復習が必要であることを周知した上で、定期試験問題を高いレベルに設定したことにより、単位の実質化への配慮が十分にもなされていたと考える。

4) 「適切なシラバスが作成され、活用されているか。」に関しては、各講義の主担当教員が、構成教員の講義内容に基づいてシラバスの作成を行っているが、講義の目的、内容、評価基準、講義日程の詳細等について明記されていることから適切に作成されていると考える。また、学生はシラバスに基づいて当講義の履修を選択している点からも、十分に活用されていると考える。

5) 「基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。」に関しては、講義概略をシラバスに記載し、また、講義内容は、非医療系の学生が理解しやすいように、可能が限り平易となるように心掛けた。各担当教員には学生の理解を助けるのに適切な教科書や参考書を講義中に紹介してもらおう等、自学自習に対する配慮を行なった。また、メール等での連絡方法により遠隔地キャンパスからも質問等ができるようにした。これらの点では、学習への配慮は行われていたと考えられる。

6) 「成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。」に関しては、シラバスに事前に作成された成績評価基準が詳細に明記されており、学生に周知されている。その基準に従って定期試験成績に基づいて成績評価と単位認定が実施されており、成績は概ね良好であることから適切に実施されていると考えている。

7) 「成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。」に関しては、成績評価は、定期試験に基づいており、定期試験は厳格に実施されている。また、

各担当教員間での成績評価に極端なばらつきがないか主担当教員における成績集計に際して確認して、成績評価の客観性と厳格性を担保するための措置を実施していると考えている。

8)「学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。」に関しては、6科目の学生授業評価は、4.3が3科目、他は、4.0、3.7、2.1であることから、1科目を除いて学習目標の達成度は良好であり、学習成果は十分に上がっていると考えられる。なお、評価が2.1と低かった医学Aについては、医学的な刺激の強い写真に対する評判が悪かったことが原因と考えられ、学習成果自体が上がらなかった訳ではないと考えられる。

9)「自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。」に関しては、大半の受講学生が講義の目標を達成していることから、自習室や図書館の整備など自主的学習環境は十分に整備されて活用されていると考える。

10)「授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。」に関しては、授業の実施に際して、初回に主担当教員から、履修に関するガイダンスを実施して、学習目標を明示し、目標の達成のためには、十分な自学自習が必要な旨を学生に周知していることから、履修指導は適切に行われていると考える。

11)「学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。」に関しては、本講義を担当する部会員は大倉山あるいは名谷キャンパスに本務先があるため、学生と直接面談しての学習相談の実施は、物理的距離により非現実的である。そこで、電子メールを主な連絡手段として学習相談と支援を実施できる体制を整備している。ただし、特別な支援の実施が必要と感じられる学生を講義期間中に同定することは容易ではないが、上述の方法により、必要があれば学習支援を行える状況にはある。

(3) 課題について

・医学教育部会の特徴として2つの遠隔地キャンパスで構成されること、また、いずれの講義もオムニバス形式で開講されているため、構成教員の入れ代わりが毎年少なくなき、担当者の交代に際しての周知事項の徹底など、部会特有の課題も有している。今年度はクォーター制の導入に当たって様々な改組が実施されたが、今年度の評価も含め、今後さらなる発展ができるように部会として継続的な努力を行う必要がある。

(4) 総合所見

以上、概略的には、本医学教育部会が担当する6つの基礎教養科目の講義においては、概ね目標を達成していると評価できると考える。

教育部会用自己点検・評価シート（様式1）

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

6科目共通して、病気に関する正しい知識と自己と他者の健康への配慮の基礎となる知識を得られることを目標にしており、例えば単なる疾病論の講義でなく、学生が健康管理への関心が高められるようにオムニバス形式を用いて工夫した。このように、部会が担当する各科目は、社会的に重要な健康や病気に関する内容を幅広く取り上げており、全体として学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等の趣旨に十分に沿ったものであると考えられる。

根拠資料

シラバス、配付資料、教材

5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

基礎教養科目の性質上、授業形態は「講義」に限られており、また、大教室での講義を実施したため、学生個々に対するきめ細かな指導や、少人数・対話討論型授業等の形式による講義を取り入れることは前年度までと同様に困難であった。しかし、教材としてコンピューターによる画像供覧とビデオ映写等の映像機器使用しているほか、講義資料の配布等の学生の要望に添った対応を行い、学生が講義内容を理解しやすいように配慮したことから、多人数の教員によるオムニバス形式にも関わらずほぼ的確な講義が行われたと考える。

根拠資料

シラバス、教材、授業記録

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

講義の内容として、社会的に重要な課題となっている疾患や生活習慣、さらには先端的医学研究についてまで幅広く取り上げることで、学生の自主学習意欲を高める一方で、合格点に到達するには、十分な予習復習が必要であることを周知した上で、定期試験問題を高いレベルに設定したことにより、単位の实質化への配慮が十分にもなされていたと考える。

根拠資料

シラバス、教材、授業記録、答案

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

各講義の主担当教員が、構成教員の講義内容に基づいてシラバスの作成を行っているが、講義の目的、内容、評価基準、講義日程の詳細等について明記されていることから適切に作成されていると考える。また、学生はシラバスに基づいて当講義の履修を選択している点からも、十分に活用されていると考える。

根拠資料

シラバス

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上） 講義概略をシラバスに記載し、また、講義内容は、非医療系の学生が理解しやすいように、可能が限り平易となるように心掛けた。各担当教員には学生の理解を助けるのに適切な教科書や参考書を講義中に紹介してもらおう等、自学自習に対する配慮を行なった。また、メール等での連絡方法により遠隔地キャンパスからも質問等ができるようにした。これらの点では、学習への配慮は行われていたと考えられる。
根拠資料 シラバス、教材

5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上） シラバスに事前に作成された成績評価基準が詳細に明記されており、学生に周知されている。その基準に従って定期試験成績に基づいて成績評価と単位認定が実施されており、成績は概ね良好であることから適切に実施されていると考えている。
根拠資料 シラバス、成績評価、

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上） 成績評価は、定期試験に基づいており、定期試験は厳格に実施されている。また、各担当教員間での成績評価に極端なばらつきがないか主担当教員における成績集計に際して確認して、成績評価の客観性と厳格性を担保するための措置を実施している。
根拠資料 シラバス、成績評価、成績分布

基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100字以上） 6科目の学生授業評価は、4.3が3科目、他は、4.0、3.7、2.1であることから、1科目を除いて学習目標の達成度は良好であり、学習成果は十分に上がっていると考えられる。なお、評価が2.1と低かった医学Aについては、医学的な刺激の強い写真に対する
--

評判が悪かったことが原因と考えられ、学習成果自体が上がらなかった訳ではないと考えられる。

根拠資料
学生授業評価

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

大半の受講学生が講義の目標を達成していることから、自習室や図書館の整備など自主的学習環境は十分に整備されて活用されていると考える。

根拠資料
成績評価

7-2 【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

授業の実施に当たっては、初回に主担当教員から、履修に関するガイダンスを実施して、学習目標を明示し、目標の達成のためには、十分な自学自習が必要な旨を学生に周知していることから、履修指導は適切に行われていると考える。

根拠資料
ガイダンスの案内、配付資料、授業記録

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。
また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

担当教員は大倉山あるいは名谷キャンパスの2つの遠隔地キャンパスに本務先があるため、直接面談しての学習相談の実施は、物理的距離により非現実的であることから、電子メールを主な連絡手段として学習相談と支援を実施できる体制を整備している。ただし、特別な支援の実施が必要と感じられる学生を講義期間中に同定することは容易ではないが、上述の方法により、必要があれば学習支援を行える状況にはある。

根拠資料
オフィスアワーの設定、連絡先メールアドレスの提示